

令和三年度

和歌文学会第六十七回大会

講演・対談・研究発表

要旨



## 講演・対談・研究発表 要旨

### 【講演】

#### 歌を読む

東京大学名誉教授

久保田 淳

いずれも和歌文学会員の平安文学研究者四人と共に、いわゆる伊達本の本文で古今和歌集を読んでいるので、木や草、虫や鳥などが詠み込まれている（かもしれない）歌などを取り上げて、その過程で考えたことをお話しする。

百人一首にも選ばれた文屋康秀の歌、「吹からに秋の草木のしほるればむべ山かぜをあらしといふらむ」（古今集・秋下・二四九）について、新日本古典文学大系『古今和歌集』は、「秋の草は「萩」を、秋の木は「楸」を隠すか。楸はヒサギ、落葉喬木の一種」と注している。「山風」で「嵐」になるという言葉遊びの技巧はどの注釈書でも指摘されているが、この考えは余り注目されていない。その当否はわからないが、万葉植物でもある久木については以前考えたこともあるので、王朝和歌ではこの木がどう歌われてきたかを少し辿ってみたい。

遍昭が「くたに」の題で詠んだ、「ちりぬればのちはあ

くたになる花を思ひしらずもまどふてふかな」（物名・四三五）の歌の題、「くたに」はやはりわからない植物だが、ここでは第五句の解釈について諸注の説を確かめ、そこに蝶が詠まれているとすれば、蝶は和歌ではどう詠まれてきたか、漢詩との関係はどうかという問題についてお話ししたい。

同じ和歌でも、それが撰集に採られている場合と家集の中で読む場合とは、違った読み方をせざるをえないことがある。その例として、伊勢の歌二首、「春ごとにながるゝ河を花と見ておられぬ水に袖やぬれなむ」（春上・四三）、「年をへて花のかぐみとなる水はちりかゝるをやくもるといふ覧」（同・四四）を取り上げ、「はしたかの野もりのかぐみえてしかなおもひおもはずよそながらみん」（新古今集・恋五・一四三）という、題知らず、読人しらずの古歌での鏡についても考えてみたい。

稲負鳥という三鳥の一つを藤原定家はどう考えていたか、藤原清輔はほととぎすを詠んだ多くの歌の中で、どの歌を秀歌と考えていたか、そもそも秀歌とは何だろうかということも、時間の余裕があれば考えてみたい。

【対談】

ローズバッドを探して

東京大学名誉教授 久保田 淳  
国文学研究資料館長 渡部 泰明

二〇二〇年秋、久保田淳先生は文化勲章を受章されました。永年にわたる国文学界への貢献ははかりしれません。その業績の中心に位置する分野が和歌であることも、言うまでもないでしょう。先生は和歌のどういふところに魅かれたのでしょうか。先生の研究の原動力は何だったのでしょうか。オーソン・ウェルズの名作『市民ケーン』は、新聞王ハーストが最後に残した謎の言葉「ローズバッド（バラのつぼみ）」が何を意味するのか、それを探るといふ体で、彼の波乱に満ちた生涯を描き出す映画でした。久保田先生にとつての「バラのつぼみ」とは何か、それを聞き出そうというのが、今回の、限りなくインタビューに近い対談の眼目です。私には一つ見当をつけている言葉があるのですが、それは、今は内緒。和歌研究に目覚めた頃から、大学院生・助手を経て、東大教官の時代、とくに藤原定家研究に邁進されていたころ、そして新日本古典文学大系や和歌文学大系の監修に注力されていた頃のことなど、順を追ってお話をうかがい、私渡部が直接存じ上げている頃のこと

は、また当方の思うところなども織り交ぜさせていただくつもりです。これからの和歌研究者への言葉などもぜひ語っていただこうと思います。どうぞお楽しみに。

(渡部記)

## 【研究発表】

### 1 和歌における同音異義表現の物象と人事との間の関連性について

早稲田大学高等研究所 フィットレル・アロン

和歌の主要技法のひとつである掛詞などの同音異義表現の構造についての研究がなされてきているものの、両方の表現の内容的な関連について明らかにされているとはいえない。同音異義表現の物象と人事の部分の内容的な関連について最も考察することになるのは、音声の共通性がなくなる外国語訳においてであり、本研究の大きな目的のひとつも、和歌の同音異義表現をより正確に他の文化に伝達する方法を見出すことである。

同音異義表現の中、当該表現が表す物象の特質などが人事と共通する例が多く、音の共通性の他、内容やイメージの関連性も見出せる。このような観点からの検討に、『後撰集』に見られる(鳥などが)「鳴く」ことと「泣く」こと、また玉鬘などが「絶える」ことと恋仲が「絶える」ことという、共通性が比較的見出しやすい表現を考察の対象とする研究がある。一方、(葦の)「節」と「伏し」や、「踏み」と「文」や、「落標」と「身を尽くし」などという、一見内容的な関連性が見出しがたい同音異義表現の場合も、こ

れらの表現が用いられている和歌を検討すると、その関連性が見えてくる。たとえば、「ふみ(踏みと文)」が用いられている和歌では、「へだてける人の心のうきはしをあやふきまでもふみつるかな」(『後撰集』雑一・一一二二)のように「橋」などの縁語が使用されることによって文通のイメージが含まれている。また、それぞれの同音異義表現の物象叙述に見られる歌語が和歌文学の中に持っているイメージ、あるいはそれと関連する他の歌語を通して、当該歌の内または外に、人事の叙述との関連性を暗示する事柄が見出せ、連想によって結び付けられる例もある。

本発表では、一見物象と人事の叙述の関連性が見出しがたい同音異義表現を数例取り上げ、物象叙述から人事の叙述への連想、また歌語間の連想の過程を中心に、その関連性について検討する。また、現在までの外国語訳において、このような関連性がどのように反映されてきているのかも目を向けたい。

## 2 『袋草紙』上巻・雑談「歌への不審に答え ない」事例に関する考察

——特に「岩(言は)」ざる歌の種類と

「映る月」の表象をめぐる——

鹿島文庫 日本文学研究室(研) 坪 美奈子

『袋草紙』(上巻・雑談)に、「順主は知らざりけりな」(菅原文時)、「しか言ふなりにや」(源経信)といった「答え」を記しとどめて展開する、「歌への不審に答えないこと」にまつわる歌会等での事例を集めた記事がある(『新日本古典文学大系 袋草紙』一一八頁)。

白河院が女房の歌を召上げた「池水に今宵の月を宿しても心のままに我がものと見る」や、歌題の「池」を詠み込まずに「不審」とされた経信の「照る月の岩間の水に宿らずは玉るる数をいかで知らまし」という表現は、いずれも「映る月」に関わり、『金葉集』秋部に並んで入る(寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて、甌池上月といへることをよませ給ひける)。

王朝の和歌には、汲み差す杯(さかつき)に射す月の光を捉えて掛詞的に詠む「杯中の月かげ」に関する用例が存するところ、前者・白河院「池水に」詠の下の句「心のままに我がものと見る」における「帝王ぶり」(『新大系 金

葉集』二八〇番歌・脚注)の件とともに、巡杯の場面で「この世をばわが世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」と詠んだ道長自讃歌との共通点並びに関係性は、当該『袋草紙』の話柄中、続く「天変少将」の一首「池水にかけを映して秋の夜の月の中なる月をこそ見れ」という表現に及んで見出されよう。

本発表では、『袋草紙』に挙がる事例を含めた「杯中の月かげ」の種類によるその「見立て」として、名月の謂たる「月の中なる月」の表象について指摘する。作中「秀歌には劣った返歌をしないこと」として収められた道長的一件(『新大系 袋草紙』二〇頁)については、詠み込まれた「欠けざる満月」に象徴される、言外の「見立て」に留意する必要がある。

さらに、経信詠の歌のことば「岩間の水」にも注目し、表現史を繙いて「岩」と「言は」の掛詞によって「言はざる」歌の種類が存することを指摘し、「歌への不審に答えない」事例集としての主題を有する、当該章節部分の「和歌説話」的な手法にかかる考察を行う。

### 3 藤原定家自筆『御室五十首』春部草稿と

#### 守覚法親王添巻の再出現

早稲田大学（非）・国文学研究資料館（研） 金子 英和

定家の『御室五十首』草稿の伝本は、現在①宮内庁書陵部蔵「京極黄門詠五十首和歌」（卷子装。五十首の次に、本来は紙背に書かれる評語が書写される）、②東京大学総合図書館蔵「軸物之和歌写」（袋綴装。詠歌行間に評語が書かれる）、③京都市歴史資料館蔵「定家卿五十首」（袋綴装。天明三年、賀茂季鷹書写本。評語は書かれない）がある。このうち①は安政四年に山田常典が「原巻」を臨写した旨の奥書を持つ。

この他に佐藤恒雄氏は、明治・昭和期の入札目録に定家自筆の春部草稿（軸装）が出品されていたこと、そこには〈守覚法親王添巻〉が伴っていることを報告している。しかしその所在が確認できていなかったため、書陵部本が最も重んぜられる資料であった。

令和二年一月、定家自筆春部草稿はふたたび市場に現れ、僥倖にも発表者の所蔵する所となった。現在は早稲田大学図書館に保管され、画像公開の準備が進んでいる。

当該草稿により、採用歌を意味する右合点の墨色が異なることが知られ、数度の推敲・吟味があったことが窺われ

る。また、春部五番歌には上下句本文それぞれに除棄の庵点が付けられている。一方、書陵部本・東大本は下句に傍線が付けられる形で除棄庵点が表される。これは、書陵部本が「原巻」の直接の臨本ではないことを暗示する。

右に述べた当該草稿と書陵部本の関係は、〈守覚法親王添巻〉によっても証される。実は同添巻は行空（九条種通）の奥書が継がれた、春部草稿の臨本である。奥書に拠れば、天正一三年に春部草稿を改装するにあたり、紙背の評語が読めなくなることを懸念し、製作したという。天正一三年に春部のみ軸が成立したために、常典が安政四年に「原巻」を臨写することは不可能であり、過去に作られた臨本を写したものが書陵部本と推定する。

口頭発表では、定家自筆『御室五十首』春部草稿と添巻を紹介し、これらが諸本の成立理解に一石を投じる資料であることを述べたい。

